

札幌市立美園小学校の取組

1. 研究のねらい

本校は、平成 25 年度よりラオス人民民主共和国のラオンガム小学校と、アジア教育友好協会 (AEFA) の御協力をいただきながら主に児童の作品交換等の交流を行っている。国際理解教育として 5 年生の総合的な学習の時間に「Laos プロジェクト」を位置付け活動を展開している。しかし、ラオスの小学生と実際に関わることは難しい。そこで、ラオンガム小学校建設時から関わっている地域の方に御助言をいただきながら、ラオスに行く際に贈り物をもって行ってもらうという活動を柱として進めてきた。

- (1) 異文化交流を通して世界の国々の生活や文化への興味関心を高める。
- (2) 我が国の伝統と文化を大切にし、世界の人々の多様な生活や文化を理解し尊重する態度を養う。
- (3) 交流を通して異文化を理解し尊重するとともに、自分の考えや意思を表現できる能力の育成を図ること。

2. 取組内容

(1) 外国の文化にふれる環境づくり

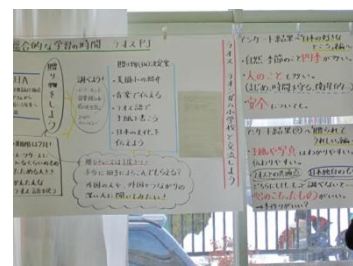
これまでにラオンガム小学校から送られてきた「ラオスの風景画」や「学校の学習風景写真」、「ラオンガム小学校の児童の作品」等を廊下の掲示板に掲示しておいた。多くの学年が日常の中で自然と目にする中で、「先生、これ、なあに?」「5 年生の総合的な学習の時間の掲示物でしょ。」等、関心のある子は先生や兄弟に質問し、5 年生が外国の小学校と交流していることを知り、興味関心を高めていた。

(2) ゲストティーチャーによるオリエンテーション

取組の第一歩は、アジア教育友好協会 (AEFA) の方や活動に深く関わりをもつ地域在住の方々 3 名をお迎えしてのオリエンテーションだった。「ラオスってどんな国?」という国土の基本情報や「自分たちにできることって何があるだろう。」「どうやってこの活動を広げていこう。」という内容まで、幅広く考える時間となった。また、実際に支援活動に取り組んでいる方の生の声を聞き、子どもたちにとっては、大変貴重な時間となった。



社会科の学習で日本の国土について学習を始めた 5 年生。ラオス人民民主共和国という国について知っている子は、ほとんどいない。ラオスの地理的な情報と共に、厳しい現実を子どもたちは知ることになった。しかし、そんな厳しい状況の中でも、他を思いやる優しい心を持ち、一生懸命勉強して、生きていくラオスの子どもたちのことを教えてもらって、心に響いたようだ。子どもたちの振り返りには、「感動しました。」「涙が出そうになりました。」と書いた子もいた。また、「大切なことは、人の役に立つこと。」という言葉に感銘を受け、メモをとっていた子が多くいた。



（３）ラオスPJ（プロジェクト）本格始動！

「遠く離れたラオス人民民主共和国のラオンガム小学校の子どもたちと交流をもとう！」という目標のもと、学習を進める。日常的に交流ができないラオスの子どもたちと交流がもてるのは、担当者がラオスを訪問する年に1回のチャンスしかない。「何を贈ると喜んでくれるのか。」「日本に興味をもってもらえるのか。」子どもたちは試行錯誤しながら自分たちが送ってみたいものを仮決定した。

（４）外国とつながりの深い方へのアンケート

自分たちが考えた贈り物が「本当に喜んでもらえるかどうか分からない。」「国も違うし、考え方も違うかもしれない。」という考えから、アンケートを取ることになる。そこで、子どもたちは、意外なことを知る。

- ・ラオスは湿度が高く、紙がすぐに破れてしまうので、ラミネート加工がお勧め。
- ・DVDやCDは再生機器が学校にない、または壊れている可能性が高い。
- ・荷物やお手紙は届くまでに1～2か月かかる。途中で行方不明になることもしばしば。
- ・楽器などは指導者に知識がないと使われずに終わってしまうことが多い。

これらの情報を得た子どもたちは、自分たちが考えた贈り物の中身を再考することになる。

（５）自ら調べてみた

この学習で外国の文化に興味をもった児童が、冬休みの自由研究で「ラオス語翻訳BOOK」に取り組む。

（６）贈り物制作開始

アンケートの回答を参考にいよいよグループに分かれて、贈り物の制作に入る。ラオンガム小学校の子どもたちはもちろんほとんどの大人の方も英語も通じない。そのため、担当者の方が子どもたちの作品の注釈や説明、お手紙等を翻訳することになるといった事実を知った子どもたちは、なるべく自分たちで翻訳をし、説明も簡単な単語だけで分かるように工夫していた。



3. 成果と課題

5年生は外国語活動も始まり、外国への興味が高まってきている。5年生の国際理解教育では、姉妹校と提携するなどして様々な国の方と何度も接し、交流を深めていくことが理想である。その活動によって、日本のよさに迫っていくことが狙える。しかしながら、何度も外国の方と関わるのが難しい場合もある。本校のケースは、「姉妹校がない。」「地域に外国籍の方もいない。」そういった悩みをもつ学校にとっても無理なく、子どもたちが意欲的に学習していける内容となっていると思う。もちろん、改善点はまだまだあると思うが、このような形で他国と比較しながら学習していくことで、日本のよさに気付いていく学習となっていることが大きな成果であろう。

年に1回の贈り物の交流のため、送った相手から反応が返ってくるのが半年から1年後になる。子どもたちにとっては、自分たちが働き掛け手応えがすぐに感じられないのが課題である。